# Easy To Love
イージー・トゥ・ラブ

## Steve Kuhn Trio
スティーブ・キューン・トリオ

1. スーパー・ジェット
Super Jet《T. Dameron》(5:30)
2. 懐かしのストックホルム
Dear Old Stockholm《Trad》(6:28)
3. エミリー
Emily《J. Mandel》(7:16)
4. エアジン
Airegin《S. Rollins》(4:44)
5. モーニング・デュー
Morning Dew《S. Kuhn》(6:00)
6. ニュー・ヴァレー
New Valley《D. Finck》(6:51)
7. ドリーム・ダンシング
Dream Dancing《C. Porter》(8:04)
8. いつも二人で
Two For The Road《H. Mancini》(5:15)
9. ビー・マイ・ラブ
Be My Love《N. Brodsky》(9:17)
10. イージー・トゥ・ラブ
Easy To Love《C. Porter》(6:11)

---

ステーブ・キューン Steve Kuhn《piano》
デヴィッド・フィンク David Finck《bass》
ビリー・ドラモンド Billy Drummond《drums》

録音：2004年2月28、29日　アヴァター・スタジオ、ニューヨーク

Ⓟ© 2004 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

＊

Produced by Tetsuo Hara and Todd Barkan.
Recorded at Avatar Studio
in New York on February 28 & 29 , 2004.
Engineered by David Darlington.
Technical Coordinator by Derek Kwan.
Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound :
Shuji Kitamura and Tetsuo Hara.
Cover Photo : © The Estate of Guy Bourdin /
Art + Commerce Anthology / G. I. P. Tokyo.
Photos by John Abbott. Designed by Taz.

スティーブ・キューンの近年の快調ぶりは、まことに目を見張るものがある。豊かなロマンティシズムに彩られたピアノ・トリオ・アルバムの大傑作「誘惑」を2001年に吹き込んだあと、翌年にはベーシストを替えてキューンは「ワルツ～ブルー・サイド」「ワルツ～レッド・サイド」という2枚のアルバムを同時リリースするという画期的な試みをおこなってみせた。2003年のアルト・サックス奏者、チャールス・マクファーソンとの「バット・ビューティフル」は、キューンのリーダー作ではなかったものの、敢えてわざわざ“フィーチュアリング・スティーブ・キューン”とクレジットされていたあたりからも、彼のピアノ・プレイが大きな聴きどころのひとつになっていたことがわかる。年令的には、すでに60代半ばという大ベテランではあるが、そのみずみずしい感性に裏づけられた覇気あふれるピアノ・タッチは、多くのファンの心を捉えずにはおかない魅力を放っている。まさにスティーブ・キューンは、“いまが旬”のピアニストなのだと断言してもよいのではないだろうか。そんなスティーブ・キューンによるこの新作も、まさに彼ならではの優雅なロマンや研ぎ澄まされたリリシズムの魅力がよく出た、聴きごたえある一枚になっている。

近年のキューンのプレイは、彼の音楽が保ちつづけてきた透明感あふれる高貴な響きの美しさはそのままに、いっそうダイナミックな力強さを加えてきている。同時にキューンは、素材のもっているロマンティックな側面にも光を当てて、メロディックな持ち味も最大限に発揮してみせる。メロディーを抒情的に歌わせてゆくことについて、少しも躊躇することなく、むしろそういったものを堂々と押し出してゆくのだが、そのことによってスティーブ・キューンの音楽そのものが、かつてなかったほどのスケール感と大きな広がりをもつものになってきたのは、やはり注目すべきことだろう。もちろんロマンティックなプレイを聴かせるようになったからといって、キューンの音楽が曲の甘さにべったり寄り添うようなものでないことは、ここに改めて述べるまでもない。みずみずしい感性に裏付けられた美しいピアノ・タッチの魅力は、このアルバムの隅々にまであふれており、親しみやすくなった分だけ、キューンのひらめきに満ちたフレーズには、いっそう磨きがかかっているようにも感じられる。

ふり返ってみれば、スティーブ・キューンの存在がジャズ・シーンで注目をあつめるようになったのは1964年、トランペッターのアート・ファーマーのバンドに加わった頃からのことではなかっただろうか。1938年3月、ニューヨークのブルックリンで生まれたスティーブ・キューンは、5才の頃からクラシック・ピアノを学ぶようになり、ボストンに移り住んでからはマーガレット・チャロフについて、レッスンを続けた。マーガレット・チャロフは、バリトン・サックス奏者として名を知られるサージ・チャロフの母に当たる人だ。13才になった頃から、ボストンのダンスバンドなどで演奏するようになり、地元で多くのギグもこなしている。ハーバード大学に進んで学士をとったあと、ニューヨークへ出てケニー・ドーハムのグループに参加。そのあと60年春には、2ヶ月ほど、マッコイ・タイナーが参加する直前のジョン・コルトレーン・カルテットでプレイをおこなったこともある。このバンドでの正規のレコーディングはおこなわれなかったが、キューンが加わっているコルトレーン・カルテットの演奏は、何曲かがプライベート・テープの形で残されているというので、ぜひ耳にしてみたいものだ。そのあとテナーのスタン・ゲッツのバンドでプレイをおこない、前述のアート・ファーマー・カルテットのメンバーになった。67年から3年間ほどはヨーロッパに渡って活動していたが、硬質なリリシズムの魅力にあふれたスティーブ・キューンのタッチは、同世代のピアニストたち、すなわちハービー・ハンコックやチック・コリア、ドン・フリードマン、アンドュー・ヒル、スタンリー・カウェルなどと比べても、優るとも劣らないみずみずしい輝きをもっていて、強烈な印象をジャズ・ファンに与えたものだった。

そんなスティーブ・キューンの音楽がもつ本質的なリリシズムが、さらに豊かな実りをみせていったのが、70年代半ば頃からのECM時代だったといえるだろう。彼の耽美的な表現にはいっそうの磨きがかかり、ひとつひとつの音がきらきらした個性に彩られていたあの時代。デビュー当時をスティーブ・キューンの第一期、そしてECM時代～80年代を彼の第二期とするならば、現在のキューンは第三期。音楽的にも成熟しきっているだけでなく、必ずしも過去のイメージにとらわれずに、いまのスティーブ・キューンは彼の表現をさらに前進させるべく、意欲的なアプローチをおこなってみせる。まさに現在進行形のピアノ・トリオ・ジャズ！　すべてを呑みこんだ上で、もてる美質のすべてをたっぷりと発散してみせるスティーブ・キューンの姿が、なんとも素晴らしい。

デヴィッド・フィンクは、多くのトップ・プレイヤーと共演して、常に適確なサポートをおこなってみせる名ベーシスト。スティーブ・キューンとは90年代の前半から一緒にプレイを続けていて、もっとも信頼関係のあるプレイヤーとなっている。ドラマーのビリー・ドラモンドも、このところのキューンのアルバムには欠かすことのできない存在。エネルギッシュな彼のドラミングが、スティーブ・キューンのピアノ・タッチをいっそう熱っぽく盛り上げてゆくのが、大きな聴きものである。

アルバムはバップ期、不世出の名ピアニストで作曲家としても多くの名作を残しているタッド・ダメロンの＜スーパー・ジェット＞で幕をあける。ジョン・コルトレーンも参加していたダメロン56年の名盤「メイティング・コール」に収められていた曲で、キューンのアルバムとしては意表を衝いたオープニングといえるかもしれない。キューンはかつて、ダメロンの“タッズ・デライト”などをとりあげたこともあったが、ここでもビ・バップ・ナンバーを、完全に彼のペースで弾きこなしてゆくことに、逆にフレッシュな感動をおぼえる。硬派のピアニストとしてのキューンの面目躍如たる、エキサイティングなトラックである。つづく＜懐かしのストックホルム＞は、スウェーデンに古くから伝わる民謡のメロディーで、50年代のスタン・ゲッツやマイルスに始まり、近年まで多くのプレイヤーたちによって好んでとりあげられてきたナンバー。スティーブ・キューンは、原メロディーの持ち味を生かしながら、メロディックに弾ききっている。＜エミリー＞は、ジョニー・マンデル～ジョニー・マーサーによる65年の作品。これはキューンの愛奏曲のひとつで、84年のアルバム「モストリー・バラード」の中でも演奏されていた。愛らしいワルツ・テンポのプレイのなかに、キューンならではの硬質なリリシズムの魅力が最高に発揮された演奏になっている。＜エアジン＞はソニー・ロリンズの有名なオリジナルで、これも「モストリー・バラード」に含まれていた曲。キューンは無伴奏によるピアノ・ソロからスタートし、演奏はリズムを加えてスインギーな盛り上がりをみせてゆく。3人のメンバーがお互いに刺激しあって、エキサイティングなクライマックスへと一気になだれ込んでゆく迫力が素晴らしい。

＜モーニング・デュー＞は、アルバム中唯一のスティーブ・キューンのオリジナルで、近年ECMからリリースされたウィズ・ストリングス・アルバム「プロミセズ・ケプト」（2000年秋録音）に収められていた作品。リリカルな雰囲気にあふれた、優しく美しいメロディーが印象的なナンバーで、キューンも抒情美の極致といったタッチを聴かせてくれる。ベース、ドラムスのさりげないサポートの表情も、とても美しい。＜ニュー・ヴァレー＞は、ベーシストのデヴィッド・フィンクの手になる、ロマンティックなワルツ・ナンバー。アルバム「ワルツ」をリリースしていることからもわかるように、この種のワルツ・タイムの演奏は、まさにキューンにとってお手のものである。原曲のもつリリカルなムードを生かしながらキューンは、自在なインプロヴィゼイションを繰りひろげてゆく。＜ドリーム・ダンシング＞は、コール・ポーターによって1941年に書かれたスタンダード曲で、ここではキューンが原曲のロマンティックなフレーズをちりばめながら、躍動感あふれるピアノ・タッチを聴かせているのが、つよく印象にのこる。現在のスティーブ・キューンの、ハード・ドライヴィングな一面がよく出た演奏になっている。

＜いつも二人で＞は、ヘンリー・マンシーニのペンになる67年の同名映画の主題歌。これも「モストリー・バラード」に含まれていたキューンの愛奏曲のひとつで、美しさがこぼれ落ちるほどにメロディックなフレーズを紡ぎだしてゆくキューンのプレイが素晴らしい。＜ビー・マイ・ラブ＞は、冒頭にふれたマクファーソンの「バット・ビューティフル」でも演奏されていた曲。歌手で俳優でもあったマリオ・ランツァが55年に大ヒットさせたナンバーで、キューンはワン・コーラスを軽く即興で流したあと、テーマを弾きあげる。オリジナル・メロディーのもっている甘い雰囲気が、優雅なキューンのタッチによって何倍にもふくらんでゆくような感じを抱かせる、楽しいトラックである。アルバム・タイトルになっている＜イージー・トゥ・ラブ＞は、ふたたびコール・ポーターによる36年のミュージカル主題歌で、ここではゆったりした感じのボッサ・ビートによって料理されてゆく。豊かなイマジネイションに彩られたスティーブ・キューン・トリオの魅力が最高に出ている、アルバムを締めくくるにふさわしい一曲になっている。

岡崎　正通